

〔修士論文要旨〕

大安寺木彫群試論

* 友 鳴 利 英

奈良時代、大安寺は東大寺が造営されるまで諸大寺の筆頭に位置する寺院であった。本寺の平城京における造営は道慈が主導し、寺内に安置された仏像は諸大寺の中でも異彩を放っていた。その詳細は「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」によって知ることが出来るが、資財帳に記載された数々の仏像は、大安寺が荒廃していくにつれて、何時しか失われ、現在一体も伝えられていない。

しかし、造営以来、衰退と復興の歴史を辿った大安寺には、現在九体の木彫像が伝えられている。現在の本尊である十一面観音立像・楊柳観音立像・伝馬頭観音立像・聖観音立像・四天王寺立像四体がそれである。

本木彫群は文献史料の僅少さもあつてか、彫刻史という分野においてもあまり深く研究されてくることがなかった。それ故、本木彫群に対する評価や位置付けも曖昧なままであるように思う。だが、本木彫群は日本彫刻史上においても際立った独自性と意義を持っていることは言うまでもないであろう。そこで本論では、実査によって得られた知見を提示し、新たな見解を論じることとしたい。それと同時に本木彫群の再評価を期したい。

本論は、評価・研究史、造形観察の順に述べた後、観察によって得られた知見から論を展開していくという順序で作成した。

前述のように、本木彫群の研究はほとんどされてこなかった。しかし、全く論考などが無い訳ではない。そこで、本章ではこれまでまとめられることのない本木彫群の研究史を概観し、合わせて現在における美術史研究が始まったと言われる明治以来、どのように評価されてきたのかも振り返ってみることにする。

明治時代、岡倉天心の「奈良古社寺調査手録」が本木彫群に関する評価としての嚆矢であるが、高い評価は与えられなかった。続く大正時代の「南都七大寺大鏡」中での評価は、現在まで含んでみても、最高の評価が与えられている。昭和時代に入ると、小林剛氏が初めて本木彫群に関する論考を発表。小林論文に対して、「大和古寺大観」中で田邊三郎助氏が批判し、これ以後小林説は支持されなくなる。

この他、本木彫群を中心に捉えた論考が発表されることはほとんど無く、木彫群の内数体を取り上げて論じるものや、一木彫の成立・唐招提寺木彫群に関連して論じられることが多くなる。それらの数本を研究史として概観する。

造形観察の項では、各像を詳細に観察。観察は、実査によって現在まで取り上げられることのなかった箇所にも眼を向け、新たな知見が得られた。観察からの作風による系統分類は、楊柳観音像と十一面観音像、馬頭観音像と不空羅索観音像、聖観音像はどちらの系統にも属さず、四天王像は持国天像のみが一具からは外れるであろうという結果となった。

本木彫群は現在まで言われてきたように、唐招提寺木彫群との類似点が多く、両者に何らかの関係を考えられる。そして、戒壇院厨子扉絵や正倉院漆金銀絵仏龕扉との類似点が非常に多いことも明らかになった。この二つの点から、現在まで論じられることのなかった事項について、新たな見解を提示していきたい。

唐招提寺木彫群・戒壇院厨子扉絵・正倉院漆金銀絵仏龕扉は、以前から鑑真との関連が指摘されており、本木彫群の造立にも鑑真、若しくはその周辺人物の関与があったのではないだろうか。その人物として、思託を想定し、彼と大安寺との関係を文献からみるとやはり非常に深い関係が窺われた。

思託と本木彫群との関係を論じる前に、四天王像の当初の形姿を復元しておく必要がある。多聞天像以外の三像は、当初の形姿から改変された可能性があるが、持国天像・増長天像の形姿は手掛かりに欠け、当初の形姿を復元するには至らない。広目天像に着目すると、背面の姿勢・髻の形状が興福寺北円堂四天王像に似ていることが指摘出来る。正面腕前の腕の動きの不自然さ、特徴的な胸甲の形を総合的に

勘案して復元すると、戒壇院厨子扉絵・正倉院漆金銀絵仏龕扉・興福寺北円堂四天王像などの内の一体にみられる、大刀を突く形姿となる。「大刀を突く神将形」は彫刻として作例が他にも存在するが、それらの多くに思託が関与した可能性があり、やはり本木彫群の造立には思託が関与したのではないだろうか。そして、本木彫群九体の内、思託との関連が考えられる像は、作風・図像から楊柳観音・十一面観音・増長・広目・多聞天像だと考えられる。

造立年代については、大安寺で思託と親交があったと考えられる早良親王の大安寺での活動に着目した。上限を鑑真一行が入京した天平勝宝六年(七五四)とし、下限を延暦十年(七九一)頃に設定。この期間で大安寺において造仏のあったと考えられる事項と、思託・早良親王の関与が考えられる事項を探し、導き出された本木彫群中の楊柳観音・十一面観音・増長・広目・多聞天像の造立年代は、宝龜元年(七七〇)前後から宝龜六年(七七五)年辺りということが出来る。本木彫群に残された問題は数多く在り、その全てを本論で取り上げることが不可能であったが、いくつかの問題については新たな見解を提示出来たかと思う。本論で提示した論が大過ないものであれば、本木彫群の再評価に繋がりと得ると思われる。